

大腸癌患者の両親における癌の頻度

Cancer incidence among parents of patients with colorectal cancer: *Sondergaard JO, et al* (Int J Cancer 47: 202-206, 1991)

著者らは、大腸癌発生における遺伝因子の関与を明らかにするため、大腸癌患者の両親における癌全般および大腸癌の発生頻度を調査した。

1982～1984年にデンマークで大腸癌の診断を受けた60歳以下の1,524人の患者が対象として選別された。続いて、これらの患者の両親の死亡原因が調べられた。追跡可能であった両親の数は、父親1,364人、母親1,411人で、癌例は1943～1986年間の癌登録で調査された。

両親における癌の期待値を計算する際、デンマーク人での一般的頻度が基礎となった。癌一般では父親1.11倍、母親1.06倍で、特にリスクの上昇を認めなかったが、大腸癌は、父親1.87倍、母親1.62倍と両親ともに大腸癌の頻度の上昇を認めた。そして、両親の大腸癌診断年齢50歳以下の頻度が一般群に比べて5倍を示した。右側大腸癌の比率が高かったことも特徴の1つであった。

今回の研究で示された、大腸癌患者の両親で大腸癌頻度が有意に高かったことは、同じ著者らが以前に行った研究(Int J Cancer 44: 225-228, 1989)で大腸癌患者の配偶者到大腸癌の増加を認めなかったことと合わせて、大腸癌の発生原因に環境因子より遺伝因子の関与が大きいこ

とを示唆している。しかし、この研究は大腸癌の遺伝的素因が他臓器癌のリスクを上昇させるという結果は引き出さなかった。

【訳者コメント】 同じ著者らの2年前の報告では、大腸癌患者の配偶者には、結婚生活の期間に関係なく大腸癌の危険率の上昇を認めなかったと述べている。つまり、環境因子の関与について否定的な結果を出したのだが、今回の研究では、遺伝因子の関与をむしろ肯定している。疫学的に常識化している食事習慣と大腸癌の関連に対するアンチテーゼである。追試が必要であろう。

(愛知県がんセンター消化器内科

小林 世美 抄)